『モモ』における現代批判について

近　藤　　悟

ドイツの児童文学作家ミヒャエル・エンデ（Michael Ende 1929−1995）は現代社会における時間の問題を「（誰も気がつかない）第 3 次世界大戦」(1)と呼んでいる。彼の代表作『モモ』（*Momo*，1973）は，主人公モモと時間泥棒である灰色の男たちとの対立を基軸として「時間」の問題を取り上げた，現代批判のメルヒェンである。エンデは現代批判を意図したものではなく「詩的課題」(2)を目指したというが，テキストに見られる現代批判の検証なしに「詩的課題」を語ることはできない。本稿ではエンデの言う「詩的課題」に先んじて，テキストに見られる現代批判を検証したい。

1．作品成立の時代背景と作品への批判

周知のように 1968 年はヨーロッパでの学生運動が頂点に達し，学生たちは因襲的な道徳観，資本主義に対してラディカルな，時には暴力的な批判を行った。しかし，多くの人々は非暴力の立場に立ち，エコロジーの問題へ目を向けはじめた。1970 年代を節目にその関心は高まり，その力は新政党「緑の人々」（Die Grünen）を結成させるに至った。また反核，反原発，環境問題が世論の焦点となり，人権問題，女性解放問題が本格的に取り上げられはじめた。このような時代を背景にして，ファンタジーを現代批判の中軸とするメルヒェン『モモ』が 1973 年に誕生した。

しかし，『モモ』が世に送り出されるや，多くの批評家たちは逃避文学，芸術至上主義，とりわけ「非政治的」であると批判した。第 2 次世界大戦後の

西ドイツではギュンター・グラスやハインリッヒ・ベルに代表されるように，作家は「現実の変革のために」書くというのが支配的な意見だったからである(3)。またブレヒト劇に見られるような「現代批判・啓蒙」という図式ではなく「現代批判」に終始している印象が拭えないのも批判された理由に挙げられるかもしれない。特にヘルマン・バウジンガーの批判は際立った一例である。それは，現実の姿ではなく「道徳的・抽象的」（moralisch-abstrakt）であって，ファンタジーが現実に関わっていないという批判であった。というのも，バウジンガーによれば「ファンタジーの次元は現実の全体性と切り離せない」(4)からである。これらの批判があったが，国家体制を脅かすという理由で出版されなかった旧東ドイツを除く旧東欧圏では評価され，ポーランドでは栄誉ある Janusz-Korczak 賞を受賞し，旧ソ連においてもマルクス主義を皮肉った個所が一部改訂され出版された。西ドイツでも『モモ』は 1974 年に青年図書部門でのドイツ児童文学賞を受賞し，『はてしない物語』（*unendliche Geschichte,* 1979）と共に多くの人々に受け入られた。

また，1981 年 10 月には旧西ドイツのボンで平和デモ行進が行なわれ，多くの参加者が『モモ』や『はてしない物語』を携えていた。それまでは「非政治的」と批判を受けなければならなかったが，それを決定的に覆す出来事であった。これは，多くの人々がエンデの作品から痛烈な現代批判のメッセージを読み取ったことの証しにほかならない。

先に触れたようにその現代批判の中核となるものは，「時間」の問題である。注目すべきことに，ザーメルは「時間」の問題を教育学と関連づけながら『モモ』を考察している。ここで取り上げられている「時間」の概念とは，人間の生き方に密接にかかわる契機である。科学と産業の驚異的進歩によってかえって人間が非人間化してしまった現代社会において，人間の時間が本当に生かされているか，人間は時間をどのように生かすべきか，という問題に対しザーメルは次のように言う。「意識の産業化」，「余暇産業」，「テレビを見る時間」は本来人間が持つべき「遊び」（Spiel）と「余暇」（Muße）の時間を規則で縛り，時間は無感覚化されてしまう(5)。マスメディアもまた，本来人間が持つ

べき遊びと余暇に対し大きな悪影響を及ぼし，人間を規制しているのは否めない。この問題は『モモ』においては，以下のように指摘されている。

> 毎日，毎日，ラジオもテレビも新聞も，時間を節約する新しい文明の利器のよさを強調し，ほめたたえました。こういう文明の利器こそ，人間が将来「ほんとうの生活」ができるようになるための時間のゆとりを生んでくれる，というのです。ビルの壁面や街頭の広告柱にも，ありとあらゆるバラ色の未来を描いたポスターがはりつけられました。絵の下にはつぎのような電光文字がかがやいていました。
>
> 時間節約こそいっそう望ましい！
>
> あるいは：時間節約をしてこそ未来がある！
>
> あるいは：きみの生活のために――時間を節約しよう！（70　下線部筆者）

上述のような「ほんとうの生活」，「バラ色の未来」(6)を求める現代社会では経済・産業によって，「生の世界の植民地化」（Kolonialisierung der Lebenswelt）(7)が行なわれている。従って「未来は否定的なもの一色に彩られ」(8)，「21 世紀の入り口は，全体的な生活上の利害が世界的に危機にさらされる〈恐ろしいパノラマ〉（Das Schreckenspanorama）」(9)となってしまった。もはや未来は「計画不可能」になり，オーウェル（G. Orwell）やハックスリー（A. L. Huxley）の SF が描いたような「ネガティブなユートピアに終わる」(10)だろう。また子どもたちの時間は「社会的な規格化」（die gesellschaftliche Normierung）(11)の枠，つまり社会的画一化の枠の中にはめ込まれる。現代社会では本来人間が持つべき自由裁量の時間が常にこのように制約を受けている。

また，シュタイナーは「純粋な人間の欲求が把握できていない」ことを資本主義体制の致命的欠陥と見なした(12)。このような現代社会の状況に対する批判に強いインパクトを与えたのが，『モモ』という作品である。

2.「救済者という資質」

ボルノーは時間を問題にするとき,「時間がどのように人間に体験的に与えられているのかという形式が問題になる」(13)という人間学的な視点から，時間を「主観的時間」（subjektive Zeit）と「客観的時間」（objektive Zeit）に分類している。シュタイナーのいう「主観的時間」における「純粋な人間の欲求」とは，ボルノーのいう「時間を持つ自由」(14)への欲求を意味していると考えてもよいだろう。モモはこのような意味で「時間を持つ自由」を身につけている。というのも，人間が時間を持つ自由を失い，ファンタジー体験が欠如しているとき，灰色の男たちが支配するような世界が登場するからである。

モモと灰色の男たちの容姿は対照的に描かれている。モモは次のように特徴的に描写されている。「モモの見かけはたしかにやや奇妙で，清潔と身だしなみを重んずる人なら，ひょっとすると驚いてしまうでしょう」(9)。これに対して，灰色の男たちは次のとおりである。「そろいのしゃれた灰色の服を着て，つっぱったぼうしをかぶり，手には鉛色の書類かばんを持ち，口には小さな灰色の葉巻をくわえています」(114)。また，モモは歩行を移動手段とし，灰色の男たちは「しゃれた型の灰色の自動車」を用いる。このように灰色の男たちが文明的生活を送り，モモは文明的生活から疎外されている。人間の関心が産業分野や経済活動に集中し，本来重要であるべき「社会や他の領域や部門から離れている」というシュタイナーの批判(15)をそのまま当てはめることができる。

モモの住む円形劇場と灰色の男たちが支配する街の描写もおよそ対照的である。モモの住む円形劇場跡は第 1 章で語られるが，その荒廃ぶりからは，過去の繁栄は思い起こせない。円形劇場にまだ多くの人々がやって来て，芝居を楽しんでいた昔の情景は以下のように描かれている。

そして，舞台のうえで演じられる感動的なできごとや，こっけいな事件に

聞き入っていると，ふしぎなことに，ただの芝居にすぎない舞台上の人生のほうが，自分たちの生活よりも真実にちかいのではないかと思えてくるのです。みんなは，このもうひとつの現実に耳をかたむけることを，愛していました。（8　下線部筆者）

ここでいう「もうひとつの現実」とはファンタジーの世界を意味し，「外的世界」に代わる「内的世界」が人間にとって本質的と見なされる。灰色の男たちが住む「外的世界」はいかに無味乾燥であるか，以下のくだりで明らかになるだろう。

大都会の北部には，広大な新しい住宅街ができあがりました。そこには，うりふたつの，おなじ形の高層住宅が，えんえんとつらなっています。建物がぜんぶおなじに見えるのですから，道路もやはりおなじに見えます。そしてこの単調な道路がどこまでもまっすぐにのびて，地平線までつづいています――整然と直線のつらなる砂漠です！（71）

ここに住む人びとの生活もまた，これとおなじになりました。地平線までただ一直線にのびる生活！ここではなにもかも正確に計算され，計画されていて，一センチのむだも，一秒のむだもないからです。（71 以下）

このような灰色の男たちの支配する世界は「商業化（die Kommerzialisierung）が徹底し」[16]，人々は「商品をむさぼるように求める」[17]結果，人間本来の本質的自由は失われ，「〈見えない力〉（anonyme Mächte）によって〈操作〉（Manipulation）されている」[18]。ここでエンデが強調したのは「快適な共同生活というユートピア」（die Utopie freundlichen Zusammenlebens）[19]の重要性である。エンデが「救済者という資質」（Erlöserqualitäten）[20]を持った人間としてモモを登場させた根本の理由はここに関連づけられている。

3. 問題の本質を解く鍵

モモと灰色の男たちとの時間感覚の相違は，先に挙げたボルノーのいう「主観的」時間と「客観的」時間の概念でもって説明できるだろう。言うまでもなく，主観的時間は現実に体験される時間であり，客観的時間は時計で測れる物質的な時間である。しかし，モモが灰色の男たちと決定的に違う点は，モモが時間を「計る」のではなく，「時を感じる」ところにある。工藤左千夫の指摘によれば，「時を感じる」という行為は，おのおの人間の感性の営みであるから，純理論的，因果律的な計測性によっては「時を感じる」ことはできない(21)。つまり「時を感じる」ことは，「主観的」であれば可能であり「客観的」であれば不可能になる。

また瀬戸明は，「全科学が自負する〈客観性〉」の支配によって，現代社会では，主観性は「迷妄」であり，客観性は「真理」と見なされることに着眼している(22)。この基準が正しいとすれば，モモは人々から「不思議な女の子」とレッテルを貼られてしまう「迷妄」の人間であり，灰色の男たちは「真理」の世界の住人ということになる。

「侵入者」（41），「黒い影」，「これまであじわったことのないようなさむけ」（42）――灰色の男たちは，これらの言葉によって形容される。彼らは「時間貯蓄銀行」（die Zeit-Spar-Kasse）の構成員で，資本主義社会，物質価値，とりわけ計量的思考の象徴であるとしばしば指摘されてきた。バウジンガーは「無味乾燥な官僚主義の代表人物」（die Exponenten einer vertrockneten Bürokratie）(23)と指摘する。彼らは言葉巧みに人間から時間を奪う。外交員 Nr. XYQ/384/b 氏は，「しゃれた生活」を願うが「時間のゆとりがなさすぎる」（58以下）と日常生活に不満を抱く理髪師フージー氏に対し，時間を銀行に預けるように勧誘する。しかしこれは，外交員 Nr. XYQ/384/b 氏によって巧みに計算された脅迫である。以下はフージー氏の残りの人生を計算している場面であ

る。

»Gut«, fuhr der graue Herr fort, »nehmen wir vorsichtshalber einmal nur siebzig Jahre an. Das wäre also dreihundertfünfzehnmillionen-dreihundertsechzigtausend mal sieben. Das gibt zweimilliardenzwei-hundertsiebenmillionenfünfhundertzwanzigtausend Sekunden.« Und er schrieb diese Zahr groß an den Spiegel:

2 207 520 000 Sekunden.

Dann unterstrich er mehrmals und erklärte: »Dies also, Herr Fuji, ist das Vermögen, welches Ihnen zur Verfügung steht.«（60 f.）

外交員 Nr. XYQ/384/b 氏が「秒」（Sekunde）という単位を多用していることと，億単位にまで計算される数字にも注目したい。というのも，平凡な日常生活を営む人間にとってはこのような大きな数字は未知なるものであり，心理に大きな影響を及ぼすからである。また，外交員 Nr. XYQ/384/b 氏はフージー氏の日常生活の「むだにすてられた時間」（62）を指摘し，一切放棄するように諭す。フージー氏の個人情報をすべて把握している外交員 Nr. XYQ/384/b 氏が「われわれの生きている現代社会では，もう秘密なんてものはありえない」（63）と断言する。この発言は，情報化社会の実態を暗示している。そして外交員 Nr. XYQ/384/b 氏は，「損得」の強迫観念にとらわれたフージー氏から彼の生活時間の「合理化」を徹底的に推し進める。フージー氏がこれまでに浪費した時間と，残りの人生にどれだけ時間が残っているかを以下のように計算表にして見せる。

1 324 512 000 Sekunden
－1 324 512 000 ,,
0 000 000 000 Sekunden（64）

残りの時間を単純に「0」と書かずに「0 000 000 000」と書いたことに注目したい。「0」の列挙は，フージー氏が自分の人生を絶望視する効果を予め「計算」したものである。このとき外交員 Nr. XYQ/384/b 氏は倹約した時間に対する「利子」を強調し本題を切り出す。つまり時間貯蓄銀行に口座を開くように勧め，時間を騙し取ることに成功するのである。上述の「秒」の多用，億単位まで膨れ上がる「数字」，「利子」などはまさに物質的価値観，計量思考に基づくものにほかならない。また灰色の男たちの名前，つまり「Nr. XYQ/384/b」などの記号表現も，その表れである。この数字による支配は「計量絶対主義」であり，「数値化」は，「全てにアンサーが要求されるプロセス」であると工藤は解読する(24)。そしてフージー氏だけでなく時間を「騙し取られた」人間については以下のように語られている。

> 時間を節約することで，ほんとうはぜんぜんべつのなにかを節約しているということには，だれひとり気がついていないようでした。じぶんたちの生活が日ごとにまずしくなり，日ごとに単調になり，日ごとに冷たくなっていることをだれひとり認めようとはしませんでした。（72）

「騙し取られた」人間に残ったものを，ザーメルは「時間にたいする不快感」（Unbehagen）と指摘する(25)。この不快感は灰色の男たちが常に口にしている「葉巻」やその「煙」が原因である。この「葉巻の煙」は人間の完全に「死んだ時間」（214）から成り，この煙が蔓延すると人間は無気力，憂鬱，無関心，感情や愛の喪失という症状に見舞われる。マイスター・ホラはこの病気を「致死的退屈症」（die tödliche Langweile）とモモに説明している。灰色の男たち自身からも「心の欠如」が見受けられるが，ザーメルは彼らの正体を「時間泥棒」ではなく，「時間を感じる心」を奪う「感覚泥棒」（Sinn-Räuber）(26)であると定義している。

さて，「時間を感じる心」を奪われた後の人間，特に子どもの「遊び」についての観察を若干しておきたい。子どもたちの使う玩具，例えば「小さなロボ

ット」は「こまかなところまでいたれりつくせりに完成されているため，子どもが自分で空想を働かせる余地がまったくない」（75）。そしてその子どもは「頭のほうはからっぽで，ちっとも働いていない」（75）状態で，「小さな時間貯蓄家といった顔つき」（186）になる。ボルノーは，「遊び」は「それ自身において楽しみにみちた活動を表す」(27)と指摘しているが，灰色の男たちにとっては「遊び・空想力」は「役にも立たない遊び」，「未来の人類に対する犯罪」（185 以下）であり，「むだ」以外の何ものでもない。

バウジンガーの言うモモの「救済者の資質」はマイスター・ホラや亀のカシオペイアの助力によって完成されるが，エンデの着眼点は，従来の現代社会の価値観に対抗する新しい観念の確立である。それは，他でもなく主体の変革につながる問題となる。「主観的」と「客観的」との時間の区別は「三十分先まで見とおすことのできる」（150）カシオペイア，「時間の境界線」（129），時空間を超越した次元に存在する「さかさま小路」（Niemals-Gasse）(28)，「どこにもない家」（das Nirgend-Haus）（132 以下）により解体する。逆向きに歩かねばならない「さかさま小路」に入った灰色の男たちは彼らにとっての常識――社会全体に対する物質的価値観，計量的思考による支配――を逸脱する光景を目前にし，大混乱に陥る。ボルノーの言う「時間性の突破」(29)が起こり，価値観が転覆させられ，新しい観念が確立された。つまり，シュタイナーの言う全てを「商品化」してしまう資本主義体制が「人間生活の真の姿」(30)を排除するような世の中にあって，モモの時間に対する姿勢は「純粋な人間の欲求」を把握し，とりわけ「精神生活」（Geistesleben）(31)を実現することに大きく影響している。

モモの生き方は灰色の男たちから見ればただ「むだ」以外の何ものにも当たらない。しかしこの「むだ」こそ，モモに救済者たる資質を与え，問題の解決に導くものであることには間違いない。モモは「傾聴」を得意とし，時間を失った人々に話を聞くことで安らぎと慰めをあたえた。しかし，結果として灰色の男たちの計画を妨害することになる。

モモはある日，完全無欠のお人形「ビビガール」を手にすることで初めて灰色の男たちと接触するが，彼女は人形を手にしたとき「いままでにいちども感じたことのなかったような気持ち」になる。その気持ちは他でもない「たいくつさ」（89）だったのである。ここでモモに接触した外交員 BLW/553/c 氏はモモの生き方に対してこう批判する。

> 「人生でだいじなことはひとつしかない。（略）なにかに成功すること，ひとかどのものになること，たくさんにものを手に入れることだ。（略）きみがいることで，きみの友達はそもそもどういう利益をえているかだ。なにかの役に立つか？いや立っていない。成功に近づき，金をもうけ，えらくなることを助けているか？そんなことはない。（略）きみがいるってことだけで，きみはともだちに害悪をながしているんだよ。（略）」（94 以下傍線部筆者）

このことはすでに述べた子どもに対する玩具やフージー氏が時間を奪われた場面と共通する。つまり，ザーメルのいう「本来人間が持つべき遊びと余暇の時間が規則で取り締まられ，時間が無感覚化され」，「たのしいと思うこと，夢中になること，夢見ること」（186）――「純粋な人間の欲求」――を忘れた状態である。

工藤は「時間」というベクトルを規定する二つの方向性を示している(32)。「むだ→鑑賞→共感→情操」と「むだ→合理化→成功の論理→損得」である。言うまでもなくモモの時間感覚は前者に相当し，それはモモの「傾聴」の能力によって，マイスター・ホラの時間論――時間という「音楽」――に結びつくのである。その際，モモは一年間眠ることにより自らの「主観的時間」を「客観的時間」に置き換える作業を行う。これはボルノーのいう「人間が時間と一体となって生き，有意義な生活を確立」(33)するための作業であり，「自らの時間に余裕を与える」ことは結果として「内面的な落ち着きと被包感」が与えられるのである。ボルノーはこのような「客観的時間」を物質的な時間を意味す

るものとしてでなく，「忍耐（Geduld）」[34]という意味において用いている。「傾聴」の力は，子安美知子のいう「私のなかでの客観性」[35]，つまりこの「忍耐」に裏付けられた「客観性」を意味している。この「客観性」の獲得こそ，モモが「救済者としての資質」となるべく条件となっていたのである。モモの時間感覚は「主観的な時間を持つ心」に「客観性」を実現させるプロセスを経て完成させられたのである。

4．エンデの立場

上述のような現代批判を読み取ったわれわれが考えることは多くの場合，その次の段階，つまり現実の変革のための「啓蒙」である。だが，テキストに見られる姿は，灰色の男たちの存在を公にしようとした子どもたちのデモの失敗（103 以下）による「時間意識の改革の叫び」の弱まりや，悪事を見抜き，公にしようとしたが逆に脅迫され，自らの時間を奪われた（181 以下）道路掃除夫ベッポが灰色の男たちの「時間秩序」（Zeit-Ordnung）に屈服する姿でしかない。ザーメルは「結局のところ道路掃除夫ベッポのような態度を人間はとらざるをえないのか」[36]と指摘する。またバウジンガーは作品が「むかし……」で始まり，ハッピーエンドを迎える伝統的手法を現代の作家であるエンデが採用したことに対して「プログラムどおり」[37]と繰り返し批判している。さらに彼はトドロフを引用しながら，時間に関する全能の力をマイスター・ホラに発揮させる場面が「寓意的」であり，その世界が自分たちにしか理解できない「秘儀」（Esoterik）に終わっていると指摘する[38]。

しかし時間に対する新しい関わりを考えた場合，モモを「救済者」として設定し，意識の変革，内面の営みの豊かさを実現するためにファンタジーの重要性を強調することがエンデの使命であった。ザーメルやバウジンガーはこのような批判をしているにもかかわらず，このような「問題提起としての作品」の意義を認めていることは重要なことである。

ファンタジーという物語は現実の世界を変革するために直接には働きかけな

い。しかし，それはなんらかの影響を現代に生きるわれわれの「心」に及ぼす目に見えた力として存在している。この影響が人間の「心の荒廃」を食い止めるものとして，エンデに『モモ』を送り出させたといえる。

使用テキスト

Michael Ende : MOMO oder Die seltsame Geschichte von den Zeit-Dieben und von dem Kind, das den Menschen die gestohlene Zeit zurückbrachte. Ein Märchen-Roman. K. Thienemanns Verlag Stuttgart, 1973. ここよりの引用部分にはそのつど本文中の括弧内にページ数のみを記した。邦訳は大島かおり訳（『モモ』岩波書店，1976 年）を参照した。

注

⑴ エンデ：エンデ全集 18　エンデのメモ箱．田村都志夫訳　岩波書店　1998 年，220 ページ

⑵ マルガレーテ・フォン・シュバルツコップフ：Momo の本．岩波書店編集部編　岩波書店　1987 年，11 ページ

⑶ 野村　滋：ドイツの子どもの本．白水社　1991 年，92 ページ

⑷ Hermann Bausinger : Momo. Ein Versuch über politliterarische Placeboeffekte.
In : W. Barner, M. Gregor-Dellin, P. Härtling u. E. Schmalzriedt（Hrsg.）: Literatur in der Demokratie. Für Walter Jens zum 60. Geburtstag. Kindler Verlag München 1983, S. 143

⑸ Karl Heinz Sahmel : Pädagogisch relevante Aspekte des Problems der Zeit.
In : Pädagogische Rundschau 4, 1988, S 412.

⑹ 原文は Bilder des Glücks 文脈を考慮し，そのまま使用した。

⑺ Sahmel : Ebd., S. 411.

⑻ Ebd., S. 412.

⑼ Ebd., S. 412.

⑽ Ebd., S. 412.

⑾ Ebd., S. 410.

⑿ Rudolf Steiner : Die Kernpunkte der sozialen Frage in den Lebensnotwendigkeiten der Gegenwart und Zukunft. Rudolf-Steiner-Nachlaßverwaltung. Dornach/Schweiz 1976, S. 32.

⒀ O. F. Bollnow : Existenzphilosophie. W. Kohlhammer Verlag Stuttgart 1955, S. 104.

⑭ 参照　ボルノー：時へのかかわり．森田　孝訳　川島書店　1975 年，25 ページ以下
⑮ Steiner：a. a. O., S. 46.
⑮ Bausinger：a. a. O., S. 139.
⑰ Bausinger：a. a. O., S. 139.
⑱ Bausinger：a. a. O., S. 139.
⑲ Bausinger：a. a. O., S. 140.
⑳ Bausinger：a. a. O., S. 141.
㉑ 工藤左千夫：ファンタジー文学の世界へ――主観哲学のために．成文社　1992 年，86 ページ
㉒ 瀬戸明：ミヒャエル・エンデの文学について（3）．国立音楽大学　研究紀要第 27 集　1992 年，111 ページ－112 ページ
㉓ Bausinger：a. a. O., S. 140.
㉔ 工藤左千夫：前掲書 89 ページ
㉕ Sahme l：a. a. O., S. 412.
㉖ Sahmel：a. a. O ., S. 414.
㉗ ボルノー：前掲書 46 ページ以下
㉘ 直訳は「一度もない小路」。文脈を考慮し，そのまま使用した。
㉙ 参照　ボルノー：前掲書 51 ページ
㉚ Steiner：a. a. O., S. 32.
㉛ Steiner：a. a. O., S. 101 f.
㉜ 参照　工藤左千夫：前掲書 87−90 ページ
㉝ ボルノー：前掲書 35 ページ
㉞ ボルノー：前掲書 34 ページ
㉟ 子安美知子：「モモ」を読む――シュタイナーの世界観を地下水として．朝日新聞社　1991 年，97 ページ
㊱ Sahmel：a. a. O., S. 414.
㊲ Bausinger：a. a. O., S. 143.
㊳ Bausinger：a. a. O., S. 142.

――大学院文学研究科博士課程後期課程――